

今・むかし新聞

第14号
令和7年3月

『八〇年生きたからこそ伝えたいこと』

戦後八〇年を迎え、戦争の話が絶えないかと思
います。少し気分が暗くなってしまう時こそ、語り部
の会は前向きに歩んでほしい。」と願っています。

戦争を乗り越え八〇年生きてきたからこそ、伝え
たいことをここに記します。ぜひ一読ください。



新聞の過去はこちら!



『港区民として生まれ育って』

高橋 雅雄

“光陰矢の如し”港区民に生まれ、港区民として育
つて、母が他界した九十四才に到達してしまつた。
他人(ひと)は、めでたいことだと言つてくれるが、
この先、どういふ世界が待っているやら、決して楽
観はできない。ただこれだけは続けたいと思う。そ
れは、自然の節理に従つて、友人達と心豊かに日々
を過ごすことだ。長州知事の縁で、詩人坂村真民
の詩、“二度とない人生だから”に出会つたお陰だと
思っている。その詩は、七つの節に及ぶ長いもので、
第一節では“二度とない人生だから、一輪の花にも
無限の愛を、そそいでゆこう、一羽の鳥の声にも無
心の耳を、かたむけてゆこう”に始まり、最終第七節
は次のように結ばれている。

「二度とない人生だから、戦争のない世の実現に
努力し、そつう詩を一篇でも多く、作つてゆこう、
私が死んだら あとをついてくれる若い人たちのた
めに」この大願を、書きつづけてゆこう」
かつて、長州一氏が神奈川県知事時代に県庁職
員にマイクを通して訓示がなされ、その結びとして

この詩の紹介があつたと記憶している。今でも私の
胸に迫るものを感じている。

私の神奈川県庁入庁は“緑の専門家”としてもっぱ
ら公園行政が中心だったが、ある日突然、他の部門
に転することとなった。庁内でいずれも初代の責任
者として文化室長や埋蔵文化財センター長等に任じ
られ、最終的には川崎地区行政センター長となつて、
“川崎風景づくり”と銘打つて川崎のイメージアップ
に取り組み、新天地開拓に微力をつくした。以上の
ように、県庁在職中は変化の多い任務に任じたが、
その間、常に造園人としての“緑と人”の関係性中心
の思索であつた。

県庁退職後は、建築系専門学校やガーデンデザイ
ン専門学校等で“造園文化論”の講師を二十年ほど、
若い人達相手に講師を勤め、老骨に鞭打つ日々が続
いた。また、地元港区みどりのまちづくり賞の審査
員を十年ほど務めさせてもらった。

最後に“趣味”について触れてみたい。人生には
趣味を持つことがどんなに大切か。
私は、神奈川県庁在職中から民謡
とサボテンの二つの趣味に夢中にな
つた。双方とも五〇年程の経歴
となる。民謡の発声は、腹の底から精一杯の力を込
めて暗記した歌詞に感情をこめる。満足に歌えるこ
とは少ないが、時には自分でも満足できる時がある
と嬉しいものだ。また、日本民謡協会主催、南東京大
会のコンクールで八〇才の部の喜代節で優勝トロフ
イを手にした時もあった。サボテンと多肉植物は、



屋根上のフレームを中心に五百種ほ
どのコレクションがあり、生命力の
強さと形体の美しさの魅力にひか
れ、今日までできてしまった。

自慢話が止まらなくなりそうなので、この程度
で擲筆することにした。

『健康保険のお陰』

井上 繁

私は満九十二歳、ここへ来て急速に体力が低下し
身体の動きは緩慢です。でも三度の食事はおいしい
し、お他人様による介護も必要なく、日々を暮ら
しております。

日本人の三大疾病である、心筋梗塞と胃がんを七
〇歳台後半に、脳梗塞を八十九歳のとき患いまし
た。それらのすべては現代医学のお陰で助かり、今
も生きています。



十九歳のとき、ある日、突然身体
全体に震えが起り、その激しさは
掛け布団の上から抑えつけて貰った
弟を弾き飛ばすほどでした。

でも、すぐに医者に診て貰いませんでした。戦
争が終わつて、焼け跡に建てたバラックに母や弟妹
たちが疎開先から戻つて、家族揃つての生活が再開
したばかり、我が家の経済状況はその日を暮らすの
がやっと、当時、健康保険制度は未だありませんで
したから、医者にかかるお金が無かつたからです。

今は、些細なことでも医院や病院へ行き、受診し、
薬を貰うのは当然のこととなっておりますが、昔は
経済上の理由から、医者にはかからなかつた、いや
かかることができなかったのです。

その昔、お医者さんの殆どが雇いの車夫が引く人
力車で往診していました。すべてがそうではありま
せんが、医者に往診を頼むのはよほどのときのこと
です。ですから、「じいさん」さんの家の前に〇〇先生
の人力車が止まつていたよと言つたことになつて、
その家の病人の状態が極めて悪いことを意味してい
ました。

私の話に戻りますが、震えは30分ほどで収まり
ましたが、次に寒気が襲つてきました。熱を測つて
みると、当時の水銀体温計の最高目盛りは42度で
したが、一瞬にしてその位置に達しました。という
ことはそれ以上の高熱だつたわけです。

やりきれないほどの身体のだるさ、手足はどんど
ん痩せて、骨と皮、一週間後のあつた日の夜、右肩の関
節に激しい痛みが起りました。その痛みは、夜間だ
けで朝が来ると収まり、夜が来ると再び起る。

3日目には右肩の痛みは収まつたものの、次に左肩
が痛む。その後身体中のすべての関節が順々に痛ん
だのでした。

医者にかかつてないのですから薬も飲まず、ただ
耐え忍んでいるうちに痛みがすべての関節を回わ
り終つて、つか月後には痛みから解放されまし
た。その後は自力のリハビリ、発病半年後には元
の身体に戻りました。

このことは人間の持つ自然治癒力の素晴らしさを
私に教えてくれました。だからといって自信過剰に
なるのは危険です。有難いことに今は健康保険制度
があるのですから、それを活用して病気に対処する
ことが必要と考えております。



この文の最初に記しましたように、
日本での死亡率が高い部類に入る三
つの病気に冒されながらも、経済的な
心配をすることなく適切な治療を受けることがで
き、そのお陰で長生きしている、何と有難いこと
でしょう。

『新橋育ち』

池田 林太郎

昭和初期、新橋に生まれ育つた子供達は早熟な者
が多かつたように思います。

私も親戚の家に遊びに行った時に伯母から「おま
せな子だね」と言われました。

それは当時、新橋が、流行の先端を行く銀座に隣
接して、有名アパート、一流商店が軒を並べており、
歌舞伎座、日劇、日比谷映画館、全線座等々のエンタ
ーテイメントの施設が沢山あつた事と、新橋には花
柳界の情緒が残っており、キャバレー美松、ダンスホ
ールフロリダ等、大人の世界を早くから見聞した事
が影響していると思います。

その上、終戦前後の日本国の激変に伴い、軍国教
育からGHQの指導による民主教育への
転換、新橋駅前の闇市を身近に味わいま
した。また、戦災孤児、進駐軍人相手の女
性達、物乞いをしている白衣傷痍旧日本
軍人、ヤクザな人を見聞して敗戦国のみ
じめな姿を実感しました。



それ故に、次の世代の為には、戦争を始めてはならない、終わらせる事は困難である。権力者は、自「保身のため国民を犠牲にする。情報を統制して真実を歪める。食料とエネルギーの自給率を高める」こと等を、常に意識してほしいと思います。

最近では、SNS、YouTube等により、自分の好む情報に片寄りがちになるようです。やはり情報は、他のジャンルもチェックして幅広く吸収する必要があると思います。

また、美術館、博物館、コンサートホール、旅行で自然や他の文化を知る等、本物に触れる機会を持つのも大切だと思います。

きっと将来に豊かな生活が待っています。

終戦後八十年、日本は幸い平和を保っています。

再び「大日本帝国万歳」の時代に戻らないように若い人々が良きリーダーに育つことを心より願っています。

『新年に思う』



中嶋 房子

今年は何事もなく静かな、お正月を迎えられ、ホッといたしました。

地震帯の上のついている日本列島ですもの、震災が多いのは、理解しておりながらも、日々ビクビクしております。家具の位置、寝室の場所等、考え、注意したり、直したり、心配しております。

幸い東京は、近年、大きい震災を経験しておりませんが、普段から、ローリングストックをして、生活しなければと思っております。戦争は体験しておりますが、地震、かみなり、火事おやし。子供の頃、鼻つたで遊びましたが、今ではどれも恐ろしいです。九十才近いお正月、とても肉体的に弱ったと感じます。心して暮らさなければと思つ口々です。

語り部を始めて何年になるでしょうか。義母の介護をしながら何十年前を思い出しております。

始めは、文章の書き方、勉強し作文でもよいと、広畑先生のお進めで始めてしまいました。

何の勉強会かも知らず……お誘いをつけて……

戦争の体験、疎開の経験、戦後の不自由な時代等

々を先生と生徒の結びつきから、他人を思うこと、大事な時は精一杯皆と協力し、日々の生活に専念いたしました。

新制中学校(芝浜中学校)は名前だけ、校舎も運動場もなく、ないないづくし、でも先生も生徒も一生懸命頑張つて、連合運動会では、毎年、優勝しておりました。一年生は、芝商業高校に、二・三年生は、神明小学校の二階に間借り教室での授業でした。でも、区の英語劇の大会で、ジャン・バルジャンで出場し、都の大会に選ばれた事は、楽しい思い出です。

『祖母佐藤昌子のことば』

この世の生き地獄



佐藤 すみ江

明治34年生まれの祖母は昭和二〇年三月三十一日、強制疎開、夫亡き後、祖母は、5人の子供を抱え三〇代の後半で麻生永坂町に移り、永坂町会事務員として働いた。

赤坂空襲で実家の医院は全滅、浅草の本家は焼け野原、ひとり末の女の子は、山梨の祖母の実家に送つていたので助かったが、その子の養育のことで祖父は40後半でガンで他界し、戦中を避難した。

ガスタンクがそばにあったので、今でいう麻布図書館のそばに避難した。祖母は、母の弟を山梨の姉の家に疎開させ、母と祖母は、町会事務所を開いた。朝日新聞に女性として初の町会事務所として載つた。その後、麻布区役所の戸籍係として74才まで働いた。

台風が来ると我が家は丘の上の一軒家、台風がビュービュー、雨戸を私は小さいながらもしっかりと押さえて家を守っていたと、母や祖母は言う。麻布永坂町の生活は私にとってすばらしい時間だった。

長男は十九才で少年兵として中国へ行き、帰ってきたときにたまたま麻布永坂町に今私共の住んでいる土地を買ってくれていて私と母と妹は移った。しかし、戦争に行き帰国した者には仕事が無い。カスカスの生活だが基地ができた後は、皆一生懸命働いて生きた。

私は港区役所に在職中、母や祖母の生まれ育った

土地と建物の保存運動があり、私は語り部に入った。港区だけではまず保存は無理、危ついでところで東京都と港区と保存運動に助人が出て今に至ります。本当にありがたいと思っています。

『港区と私』



泉 宏

嘉永二年生まれの祖父が、佐賀鍋島藩から江戸出仕となり、青山に住み、父の兄弟七人が育てられ、その子供として私の兄弟五人が大正昭和の初めに生まれ、皆青山小学校に学んだ。私の子供も青山育ち青山小学校に通学したから、この青山で百四十年四代続いた家系である。

昭和二十五年五月二十五日の山の手空襲で家と父を失い、敗戦後復興出来た兄達、母姉は家の再建の為、青山に戻り、私だけ疎開で転校した埼玉熊谷中学を卒業する為残った。私が青山を離れたのは、その二年半だけである。

戦後復興した青山は戦前の様に閑静な住宅地になったが、オリンピックが終わりバブル経済となり地揚げが横行し、住宅地が商業地に一変した。この青山の変化が嫌いで、子供達も高校を卒業したので、平成元年に世田谷に移り住む事にした。来て見て驚いたのは青山時代の友達が既に多く住んで居たことだ。皆青山の変わり様に嫌気がさし、似たようなこの地に来たといつ。

私を含め昔の青山への郷愁は根強いものである。昭和二十二年まで赤坂区と呼ばれた青山通りには都電が走り、道に沿って小売商店が立ち並び、それなりに街並みができていた。

併し今は、道路は拡幅され、同時に都電は撤去され、小売店は大形店舗に追いやられ、街並みが一変した。町の経済的発展等で致し方ないと思いつながら寂しいものだ。今住んで居る世田谷も私の若い頃は田畑が多く住宅地とは云えなかつたのだから時代遅れの考え方も知れぬ。

私は建築の設計が好きで長い間この世界に居た

が、恩師である教授に命じられ、建築の講師を二十年程務めた。又首都圏の裁判所から建物の鑑定を依頼され更に高じて東京地裁の民事調停委員を七十二才まで務める事になった。

仕事の為に地方にも出掛けたが港区を含め東京都内の仕事が多かった。拾五才の時に経験した山の手空襲の縁で「表参道の燃えた日」の編集委員会の代表となり、現在は、その語り部の役を引き受けている。

その様な訳で青山とは縁が切れない様だ。私の場合空襲時に生き延びた事に運命的なものを感じ、どの様な苦しみにも会つても命は定めに託すべきと思つている。何時の間にか九十五才を迎え、この才になると昔日の友人知人がこの世を去り孤独になるものだが、幸い港区の語り部の会に参加出来、未だ歩行可能なので、カルチャーセンターに出向いて歴史講座等を受講している。

或る作家が「九十才何が目出度い」と話していたがそれを読んで余りにも同じ思いなので高笑いしました。

年寄りの長話と思われるので、これで筆を止めます。またの機会があれば再び長話を致しましょう。

「ばるーんの」語り部ってなあに?

平成十二年「生涯学習ポラリティア講座事業として、生涯学習センター内桜田小学校記念室に、新橋界隈を中心とした区民の方々が集まり、「昔の港区」の学習会を行っています。平成十五年度からは、小学校の学習支援活動として、語り部のメンバーが区内小学校に出向き、子どもたちいろいろな昔話をしています。

そして、平成二十八年からは、港区平和青年団の事前研修の一環として、高校生の皆さんと交流会を行っています。戦争の悲惨さや平和の大切さを経験者の言葉として伝えるために活動をしています。

地域の歴史や暮らし、戦争の貴重な体験など、過去を風化させずに未来へ語り継ぐために現在もメンバーを募集中です。ぜひ、興味のある方は、「ばるーん」語り部「担当まで」ご連絡ください。

発行・問合せ 港区立生涯学習センター(ばるーん)

住所 〒105-0004 東京都港区新橋三十一番一三
電話 〇三(三)四三二(一六〇六)FAX 〇三(三)四三二(一六一九)